

コラム

「パンデミックが終わっても元の世界には戻れない」

—ジャック・アタリ著、林昌宏、坪子理美訳「命の経済」
(プレジデント社、2020年) より—

政治経済研究所 合田 寛

パンデミックのさなか、暗いトンネルの先を見つめる目も必要だ。コロナ後の世界はどう変わるのか…。欧州の代表的知性の一人と言われるジャック・アタリがロックダウンの中で考えた思索に耳を傾けてみよう。

アタリは、パンデミックが終息したとしても、「パンデミック以前の世界に戻ることはできない」、「パンデミックの危機をチャンスに変えようではないか。いまこそその時だ」と考える

アタリは未来の企業像・労働像を考える

今回の危機によってこれまで重視されてこなかった看護婦、清掃員、レジ係などの職業に注意が向けられる。これらの仕事に従事する者に感謝するだけでなく賃金を上げ、労働手段や環境を整備し、雇用を増やす必要があるだろう。またテレワークがより自然な労働形態になるだろう。

2035年には10億人がノマド化(注)し、自宅など、事務所以外の場所で働くようになるかもしれない。しかしこれによりあまりにも多くのものが失われる。ほとんどの創造性は偶然の出会いや不意の会話から生じる。また会議などの利点の多くを占める「出会い」が失われる。

企業のもっとも重要な場はコーヒーマシンの前やカフェテリアだ。こうした職場が失わ

れると仕事上の人間関係が冷え切った人間味の無いものになり、金銭にしか関心を持たないものになるだろう。遠隔会議は社会的なつながりを徐々に分断していく要因の一つとして、集団構造を緩やかに解体していくだろう。

企業にとっては、従業員は自己愛に満ちた不誠実な傭兵のような人物だけになってしまう。従業員はテレワークで孤立しているので解雇されやすいと思い、企業の価値観に違和感を覚えるようになる。

アタリは各国の巨額の財政出動の行く末について語る

コロナ対策で積みあがった巨額の公的債務を大胆に減らすにはどうすべきか。その方法には、きちんと返済する、踏み倒す、戦争、経済成長の4つがある。4つめが最良の方法であるが、どの方法も可能性がなければ、責任を中央銀行に押し付ける。そうすることによって政治家は解決策が見つからなくても、問題はいずれ消えると考ええる。そして改革は一切行わない。いかなる支援も受けられない人は失業、自己破産、住宅の損失さらに飢餓が蔓延するであろう。その間に生活基盤がぜい弱な人や貧者に危機の代償を払わせる準備が進行する。

アタリは独裁政治の陰鬱なパンデミックを予感する

パンデミックの下で、自由よりも安全が優先され、人々は外出制限、都市閉鎖、国境閉鎖、他者への監視が当たり前と思うようになり、多くの国で民主主義がぜい弱となっている。全体主義は時に独裁者の存在なしに、社会全体が急変することなく、特別な告知もなく、自分たちのことをまだ民主主義者だと思いつつも、そうではなくなっていく政治家たちに支えられ、勢力を拡大し続けるだろう。

アタリは危機をチャンスに変える経済として「命の経済」を提案する

「命の経済」とは誰もが健やかに暮らせるように尽力するすべての企業をまとめたものだ。すなわち健康、疾病予防、衛生、スポーツ、文化、都市インフラ、住宅、食糧、農業、国土保全、さらに民主主義の機能、安全、防衛、ごみ処理、リサイクル、水道配水、再生可能エネルギー、エコロジー、生物多様性の保護、教育、研究、イノベーション、デジタル通信技術、商取引、物流、商品配達、公共交通、情報とメディア、保険、貯蓄、融資などが含まれる。

これらは相互に結びついている。「命の経済」部門のGDPと就業者数が国全体に占める割合は、アメリカでは58%、EUでは56%、日本では51%であるが、これを80%まで引き上げる必要がある。これは始まったばかりの不況から永続的に抜け出すための最良、最速の手段となる。

そのためには世帯ではこれらの費目に関する予算を増やす、雇用主はこれらの部門で働く人々の報酬と社会的地位を引き上げる、銀行、株主、国はこれらの部門の企業を優先的に支援する。「命の経済」に含まれないあらゆる部門（自動車、航空機、化学、プラスチックなど）は環境の最大の敵だ。これらの企業は経営方針を転換することによって「命の経済」に活躍の場を見出すであろう。

最後に、パンデミックでアタリが到達した「時間」についての考察を紹介しよう

「一つ一つの瞬間を快活に生きる」

結局この危機の最中に真っ先に悟るのは、大切に扱うべき唯一のものは時間だということ、それも快い時間こそが本当に希少かつ価値を持つということだ。日々の時間は不安や浅はかなことに費やすべきではない。「自己になる」姿勢を模索することによって、個人の時間はこれまで以上に豊かになる。資本主義とそれを支える人工物の狂った発展が、パンデミックによって己の限界をついに見出したかのようなのだ。（編集部注 ノマド、英語ではnomado=「遊牧民」の意味。近年広がりつつある、IT機器を駆使してオフィスだけでなくリモートワークなどで仕事をする新しいワークスタイルを指す）